

報告論文集

越境

— 創刊号 —



久留米大学比較文化研究所
日本・アジア比較文化研究部会 2025

目次

論 文

丸山豊の戦時詩……………浦田 義和（比較文化研究所研究協力者）

中島敦とショーペンハウアー・覚書き……………藤本 晃嗣（文学部講師）

資 料

矢原礼三郎——経歴及び著作目録（増補改訂版）……………与小田 隆一（文学部教授）

吉田勇輔油彩画500点・展を終えて—「個展で展示された具象油彩画数508点」2025年2月日本記録樹立……………吉田勇輔（比較文化研究所特別研究員）

*表紙絵 吉田勇輔

丸山豊の戦時詩

浦田義和

1. はじめに

久留米の詩人丸山豊は、戦後極めて早い時期の1947年に安西均、野田宇太郎らと詩誌「母音」を創刊し、谷川雁、川崎洋、森崎和江ら有能な文学者を育てたことで知られている。

丸山は、戦前の福岡県中学明善校在学中より野田宇太郎らと同人誌「日時計」を発行していたが、その後上京、しかし1933年には早稲田大学第一高等学院を退学し、九州医学専門学校へ入学した。郷里で同人誌を創刊したり、詩集を刊行するなど文学活動を精力的に行ったが、1940年1月久留米陸軍病院付見習士官として入隊し、同年11月に軍医少尉になり、翌1941年8月陸軍軍医学校へ派遣され、同年11月大日本帝国陸軍第14軍第48師団の坂口静夫少将の率いる坂口兵团司令部付軍医として南方に向かった。

丸山豊の南方戦線における体験は、のちにエッセイ「月白の道」として刊行され、人口に膾炙されているが、南方での詩作品については、これまであまり取り上げられていない。戦時中、戦地で書かれた詩については、今のところ、1946年4月俘虜としてタイで編集された詩集「孔雀の寺」が参考になる。本稿では以下丸山豊の戦時詩集「孔雀の寺」について、取り上げる。

2. 南方での足跡

具体的な作品分析の前に、「月白の道」「孔雀の寺」および南方派遣軍坂口兵团の足取りを手掛かりに、軍医・丸山豊の南方での足跡を辿るとおおよそ次のようになろう。

1941年11月、パラオへ。12月20日フィリピン・ミンダナオ島ダバオ占領。12月22日ルソン島占領。

1942年1月2日マニラ占領。1月11日ボルネオ島タラカン上陸。1月24日同バクパパン上陸。1月31日アンボン島上陸。2月20日チモール島上陸。3月1日ジャワ上陸。5月頃中国雲南省竜陵駐屯地へ。そこでマラリアに罹り、野戦病院を経てマレー・ジョホールバル陸軍病院へ。回復後マレー・ペナン島、ビルマ・ラングーン、ビルマ・ラシオを経る。

1943年3月雲南の騰越司令部着、水上少将部隊に転属。軍医中尉進級。

1944年5月ビルマ・ミートキーナへ向かう。8月1日水上閣下から撤退命令が出される。8月3日水上閣下自決。ミートキーナ守備隊陥落。(9月7日中国・拉孟陣地陥落。9月14日中国・騰越守備隊陥落)9月末、国境のビルマ・バモーを経て雲南省芒

市到着。10月頃、雲南省龍部隊司令部到着。その後、北ビルマからシャムのチェンマイへ撤退。

1945年8月15日シャム中部のバンダーラで終戦。軍医大尉に進級。

1946年4月詩集『孔雀の寺』執筆。6月8日帰郷。

以上のように推測される。

3、詩集刊行の意図

詩集『孔雀の寺』は、帰郷後の1947年2月、郷里久留米の出版社金文堂から刊行されているが、その「巻末の言葉」に「昭和21年4月 シャムのキャンプにて 丸山豊」とあることから、執筆時期は1946年4月頃と思われる。

戦時中の心境について、「巻末の言葉」では、次のように吐露されている。

私の内奥を占めてみたのは、戦ふ者のおのづからな信念と決意であつた。生と死との間隙を緊迫した魂で縫ひあるくとき、私は、おのれの肉体をペンとして危険な詩歌を書続けるのみであつた。

ここでは、当然のことながら日本軍軍医としての「信念と決意」であり、だから詩人・文学者としての従軍ではないことを断っている。そうではあるが、従軍以前の文学青年の感性は消そうにも消せなかったことが、続いて述べられている。

私は、戦場の日々そのものに芸術的な充溢をあたへようとつとめたものの、火薬の狂騒と愛情へのかぎりない飢渴は、ともすれば私を打ち倒そうとして、わづかに、土地の鄙びた風俗や、運命へのおなじ決意をもつ戦友の友情が一掬の水を注いでくれた。

と、「土地の鄙びた風俗」と「戦友の友情」が救いであつたと述べている。「土地の鄙びた風俗」とは、南方の戦地における田舎の素朴な生活の様子のことかもしれない。

続いて、詩集を編む心境について次のように述べている。

今や俘虜である。いかにも自由な俘虜である。魂は柔軟になった。(略) 私の下羽根が再びくすぐったい柔毛におほはれるのを感じた。しかし之もあるひは深い傷口を秘めた羽根かも知れぬ。険しい快癒！

と、今後の文学活動が詩作の上では平坦な道のりではないことを述べている。

私は詩を書かうところみた。五年間の戦旅から、冷酷と忿怒と凄愴の部分をとりのぞいて、素朴な回想の四行詩を得た。之らは決して私の詩の本格ではあるまいが、私にとっては永久に捨去ることのできぬ素描帖となるであらう。

このような意図で、四行詩28篇が編まれた。このほかに作者自ら言っている「戦時中の詩五篇」を付し帰国後刊行された。四行詩には「孔雀の寺」というタイトルが、戦時中の詩五篇には「鶴を斬る」というタイトルが付けられている。つまり四行詩28篇

は、戦後タイの捕虜収容所で書かれ、戦時中書かれた詩は「鶴を斬る」5篇であるということになる。四行詩は、しかし、広い意味での戦地で書かれているので、双方合わせて、本稿では戦時詩の対象とした。

4. 作品分析

これら双方の詩には、すべての詩に地名が付いており、「鶴を斬る」を除いてほぼ時系列に並べられていると思われる。

4行詩では、パラオは「珊瑚礁」2編と「礁湖にて」「椰子酒」の4篇、ミンダナオは「天の誘ひ」「火山麓」「転獄」の3篇、ボルネオは「螢」「熱愛」「疼痛」「蟻」の4篇、ジャワは「緑の市場」「回教寺」「素馨匂ふ」の3篇、マレーは「海軟風」「旅人椰子」の2篇、ビルマは「寐佛」「孔雀」「乾季」「面影」の4篇、雲南省は「十七夜」「露營」「天の河」「蝙蝠」「仲秋節」の5篇、シャムは「精舎にて」「三姉妹」「森の舞踏」の3篇である。

「鶴を斬る」では、雲南省は「鶴の杣道」「鶴を斬る」「火の魚」の3篇、ビルマは「孔雀」「牧歌」の2篇である。

以下、四行詩『孔雀の寺』28篇と詩『鶴を斬る』5篇を、地域別に分析した。

① パラオ

詩「珊瑚礁」は、サンゴ礁の美しさを「こんなに華麗な色」「くれなゐの頬」と愛でながら「無為の寺―あぢけない蟲の億万/思へばわれわれの境涯も…」と、サンゴ虫の死骸に事寄せて先の道行きへの不安を書き付けている。「礁湖にて」は「歴史のうららかな頬」のような太古からの美しい自然を映す礁湖に「孤舟」を浮べて感傷に耽りたいのに、「非情の手」つまり身近に迫っている戦争の影から逃れられないことを慨嘆している。「椰子酒」はそのような不安の中で、一瞬の慰めが描かれているようだ。「椰子の実ほどのおまへの顔は/私を酔はす蠱惑となる」とある。酒を介して女性が接待する戦地での場は、酒場、旅館、慰安所があった。また、そこでの女性は、日本人、沖縄人、「朝鮮」人などであったとの証言がある。¹

1 ウェブ「日本軍慰安所マップ」(w a m 女たちの戦争と平和資料館作成)によれば、パラオ本島ほか各島に日本軍慰安所があり、日本兵、日本軍属、女性他沢山の証言があり例えば1943年4月コロール島では日本軍軍医の「店の入り口には若くて可愛らしい女の子が数人並んでおり、これならばよしと上がり込む。」という証言もある。『月白の道』の「石の小道」でも、現地女性を女給とだまして徴用しようとしたことが明かされている。

パラオを含むマーシャル諸島でのアメリカ軍との戦闘は、1944年3月頃からであるから、詩の背景時日の1941年は、まだ戦闘はなかった。

② ミンダナオ

丸山軍医の属する坂口兵団は、日本統治地のパラオを出て、米国植民地のフィリピン南部のミンダナオ島に向かい1941年12月20日日本軍はダバオを占領した。ミンダナオを舞台に3篇の作品が書かれた。

詩「天の誘ひ」は、戦争という現実からの逃避願望を、熱帯の太陽に照りつけられる「私」を「劫初への郵便切手にしておくれ」と比喩的に書いた詩である。

詩「火山麓」はダバオにある標高2954mのフィリピンの最高峰であるアポ山・別名「ダバオ火山」のマグマを思っただろうか「誰だ 人を殺めるのは？/未知の突撃へたかぶる私」と連想し、一方麻畑に照る月光を「誰です 非業の死をとげるのは？/麻畑の月光にやるせない私」と連想した対句的表現の詩である。「麻畑」の麻はマニラ麻とかダバオ麻とか糸芭蕉、現地ではアバカと言われる芭蕉科の高さ5から7メートルになる植物で、丈夫な漁業用ロープや衣料の材料である。1925年にはフィリピンでの栽培を見たオランダ人によってスマトラ島に大規模なプランテーションが作られ、第二次世界大戦前の日本人もダバオ市に渡り、日本人麻栽培従事者が2万人におよんだと言われている。軍医丸山豊は、沢山の民間日本人から突出した己の孤独を感じていたのだろうか。

詩「転獄」は、スペインからの独立運動家ホセ・リサルが刻まれた銀貨と、真っ赤に燃える珊瑚樹が交換されるという表層内容だが、深層では、リサルスの流刑地ミンダナオを舞台に、「(銀貨が)モロ族のたくましい手へおさまる」と反米独立運動を戦っているイスラム教・モロ族との連続性を意味させている。ホセ・リサルスのイギリス行に同行した自由民権運動の壮士で日本開化期の政治小説家末広鉄腸はリサルスをモデルに「南洋之大波瀾」を著わしている。丸山豊に、戦中期のモードである明治以降のアジア主義と連続している大東亜共栄圏思想の影響も考えられる。題名の「転獄」とは、スペインの獄からアメリカの獄へと虐げられているフィリピン国家の事であろう。

③ ボルネオ

日本軍はその後1941年12月22日ルソン島に上陸し、続いて翌1942年1月2日にはマニラを占領した。更に同年1月11日にはイギリス領ボルネオ島タラカンに上陸、1月24日には南下して油田のある同島バリクパパンに上陸している。

詩「螢」は、太古からの自然の美を失いたくないとの熱望が「森の陶醉を乱さぬために/この美しい哨者の眼/数限りない螢の光」に込められている。丸山豊は、大自然の美をこよなく愛す抒情詩人であった。

詩「熱愛」の「陶醉の一秒なら/太陽へ刻む/空しい百年なら/鰐へ喰わせろ」は、多分

に日本浪漫派的な、或いは1942年7月に行われた「近代の超克」座談会的な近代百年の歴史の否定言説である。「近代の超克」座談会は、哲学者西谷啓二らの京都学派（「世界史の哲学」派）、亀井勝一郎ら旧『日本浪漫派』同人・小林秀雄、河上徹太郎ら『文学界』同人の文学者・文芸評論家により構成されていた。

詩「疼痛」にも反近代文明的な文言が「潮が干いた原始の渚」と出てくる。そのボルネオの純粋な原始を「私の孤独な足跡で」汚したから自然への私の「傷口」と表現されるのだ。詩「鱻」の「鱻」は、西洋の侵略から南海を守っているのだろうか。侵略に晒されている東南アジア諸国を「喪の女」と表象しているようだ。

④ ジャワ

日本軍は1942年1月31日インドネシア東部のアンボン島に上陸、その後同年2月20日チモール島に上陸し、3月1日にはジャワ島上陸を果たしている。丸山軍医の所属する第四十八師団坂口支隊は、蘭印軍と戦闘しながらジャワ島を攻略した。

詩「緑の市場」では、現地女性の姿を「朝の野菜市のなかで/おまへは明るい笑を見せる/その真珠の葉で噛んでおくれ/私のはるかな旅のおもひを」と青春の復活をロマンチックにうたった。詩「回教寺」は異国情緒たっぴりなアザーン（祈り）への物見遊山的な軽薄な心情を「燕の糞が額を打った/『去れ！ 祈りを知らぬ巡礼よ』」と戒めている。丸山豊は、日本軍部の標榜する大東亜共栄圏思想へ一定のシンパシーを持っていたが、他民族・国家の宗教・文化を尊重する知識人・文化人でもあった。

詩「素馨匂ふ」は大自然の懷に癒されながら、「人を殺める」戦争に参加している己の身の矛盾に「いはば私の母刀自/素馨のかげの木の椅子よ/夜な夜な渦をなす霧の中で/意味もなく下唇を噛むところ」と歯噛みするのであった。

日本軍のスピーディーな勝ち戦に乗かって、ここまでの四行詩には余裕が見られる。

⑤ マレー

1942年丸山は中国雲南省龍陵駐屯地でマラリアに罹り、野戦病院からマレー・ジョホールバルの陸軍病院に移った。

詩「海軟風」と詩「旅人椰子」には、どちらも「夢」が出てくる。陸軍病院での、ある意味気軽な療養の日々の一コマが切り取られているようだ。「海軟風」で「王宮で/古風な緑の砲を見た/ずどんと一発うつろな音で/綿雲みたいな」とかつてのポルトガル支配をにおわせているが、切迫感はない。「旅人椰子」も「たたかひの日の軽い夢/椰子の縞目を走るひと」と戦時に触れているが、旅人椰子の別名オオギ芭蕉の形状からの連想を余裕をもって描いている。

⑥ ビルマ

マラリアの癒えた丸山は、1943年ジョホールバルからマレー・クアラルンプール、ペナンから、ビルマのラングーンを経て、戦線への復帰の為に雲南へ向かった。

詩「寝仏」は、ラングーンのチャウタッチーパゴダの、1907年に建てられた全長70m、高さ17mの巨大な金の寝仏が詩われていると思われるが、寝仏の足裏にある仏教の宇宙観を表した108個の絵からの類推だろうか、「かなしや/カラスが千羽」と、また詩「孔雀」では、きらびやかなはずの孔雀に「いたましいかな 野の孔雀/美しいかな その虚勢」と、手放しの讃歌を歌えないのは、やはり戦線への復帰を喜べない作者の感懐が表現されている。「大きなサボテンが/光を嚙んでは/吐きすてる/私も亦…」(「乾季」)も、希望の持てない心境が吐露されている。「象牙の数珠が光るよ/孔雀の頸に/少女の腕に」(「面影」)は元ビルマ王朝の国旗や銀貨にデザインされた災厄を祓う孔雀明王のイメージだろうか。しかし続けて「ほろびやすい哀歎の枝に」と、不安を書き付けている。

ビルマでは四行詩ではない詩「孔雀」と詩「牧歌」が書かれている。

詩「孔雀」は、「王城のほitori」とあるから、ラングーンから北上した旧都マンダレーにある、1885年英国によって滅ぼされたビルマ・コンバウン朝王宮跡がうたわれていると思われる。1939年1月に、連合国側が中華民国支援の為に整備した補給線で、ラングーン(ヤンゴン)からマンダレー、ラシオ、保山市及び昆明市を經由して重慶市に至るビルマルート遮断を目的として、日本軍がバゴー・ラングーン攻略を経て、英印軍が撤退したマンダレーを1942年5月2日に占領し、王宮を含む要塞は日本軍の兵站部に転用されていた。「大らかに両の羽をひろげる野の孔雀」の「その羽根の千のまなざしは/死の時のしづかな流れへ/絶えず見開いた智慧の眼か？」と表現されている。

「兵士は光を手枕にしばらくの休息/精霊にみちた泉を掬めば/水に映るエトフラの血の色」とあるので、ビルマ旧王朝がイギリスに支配された事と、また日本軍兵士の行くえを暗示している。ここには滅びた旧王朝への哀惜の念と自らの不安が表現されているが、「さあれ/兵士は休息の愉しさ/ジャスミンの香を踏み分け/清らかな水を掬んで/太初のかなつかしい琴をきく/未来の青玉をぐつとのみほす」と、一時の慰安を愉しんでいる。先に引用した「慰安所マップ」では、1942年ラングーンでも、次のような元日本兵の証言が記録されている。「空襲下でも慰安所は超満員であった。兵隊には、もっぱら朝鮮の女子、将校専用には日本婦人。危険にさらされながらも、慰安所には門前市をなす有り様だった。」とある。詩「孔雀」に対する筆者の解釈が当たっているとすれば、戦時下において、日本軍軍医丸山豊は、兵士の大東亜共栄圏思想と慰安所通いに対し、それを問題視する視点はなかったということになる。

詩「牧歌」は、「たたかひはすでに北へすすみ/心をみたす繭のかずかず//ああ 草に枕に天をあふげば/ふりそそぐ十方無碍の日の光」と、仏教と共にある自然の野山と牧夫の生活をうたい、他国・他民族からの支配や戦争以前の生活に戻ることにへの願い、祈りがささげられた詩であるといえよう。

⑦ 雲南省

1943年3月に丸山は、雲南省の騰越司令部に着き、坂口兵团から水上少将部隊に転属している。中国軍にアメリカ軍を加えた雲南遠征軍が騰越に侵攻する1944年6月27日までは、騰越での敵軍とのし烈な闘いはなかったようで、次のような四行詩四篇が作られた。

詩「十七夜」では「陣屋の月の」とあるものの「山には山の寝ものがたり」とあり、詩「露營」でも「おくにじまんの兵士たち」と切迫感はない。

詩「天の河」では「歩哨のひとみのこみどりは/死をためらはぬ琅玕ぞ/夜のしじまへまたたいて/銀河の光のひとつとなれ」と部隊愛、戦友愛が吐露されている。詩「蝙蝠」では「青い髻を消えてゆく女/麝香を買つか/それとも一服の毒を得るか」と蠱惑の裏にある一抹の不安を述べた。

詩「仲秋節」は、9月の中国の行事の夜の景色を「いのちを絃の胡弓のままに/密輸の輕舸は漕ぎわたる」と描いた。

1944年5月 丸山の属する水上部隊は、北ビルマ・ミートキーナの救援に派遣された。その後8月1日水上大将からの撤退命令が出、8月3日水上大将自決。ミートキーナ守備隊は陥落した。続いて9月7日ラモウ陣地陥落、9月14日騰越守備隊陥落。丸山は9月末国境のバモーを経て（雲南省）芒市に到着した。

詩「鶴の仙路」は、少数で激戦地へ向かう様子だろうか、絶望が描かれている。ミートキーナ戦は日本軍守備隊が、数十倍の兵力の中国アメリカ連合軍の攻撃にさらされ潰滅した戦闘で、水上部隊は、少数の兵隊で守備隊の増援に向かわされた、事実上の玉砕戦であった。「いのちの秘義にふれながら/ひたすらにたどりゆく路/（略）/世界のおくがへすすみゆく路」とは、ほとんど死出の旅路を意味していよう。夜明けが来ても「ほろびやすい神々の気配」であり「鶴の家族は旅ころも/屋根より天へわたりゆき/まぼろしの影するどい啼声/ああ陶酔のときはたまゆら/絶対の路はかぎりなくつづく/かぎりなくつづく」鶴の啼声は天に届く神秘的な吉祥を表すと言われているが、ここでは反転し、不吉が意味されている。

詩「鶴を斬る」は、長寿と希望の象徴「鶴」への断念を叫ぶ酷薄で悲壮な詩である。ミートキーナからの敗走の様子だろうか。「唾の隊伍はよろめいて/或る孤独者はふりかへる/九十九折の寂寞のみち/かすかな追憶の尾をひいて/青白い燐の光にもゆるみち」とは、信賴する上官の「水上閣下」に去られ、死に取り巻かれた逃走の様子だろう。「天には雲/雲には鶴」と幻想するが、現実には「われらと陰険に対峙するもの/緊迫した空間」に満たされ、「天」の「鶴」は「やるせない黙示」つまり死の暗示でしかない。だから「灰色の空へつるぎをかざし/おのれの非情に呼子をふいて/斬れ/斬れ/鶴を斬れ」となるのである。この場合「鶴」とは、長寿と希望の象徴、抒情精神の象徴でもある。「さらに冷

酷な天の広場へ/かなしい雪白を野ざらしにせよ」と雪白つまり鶴への決別を叫んだ。詩人丸山豊は、このとき詩との別れ、つまり死を覚悟している。

詩「火の魚」は「ヤルト島にゐる弟への手紙」という詞書が付されている。「弟よ/戦ひの日の礁湖を泳ぎ/呼びとめよ呼びとめよ/たまゆらの激しいものを/走りゆく真紅の魚を呼びとめよ」と、自らの玉砕を前に「真紅の魚」つまり生命を永らえよとの直截なメッセージが吐露されている。

⑧ シャム

1944年10月、丸山は雲南省龍部隊司令部到着。その後北ビルマから（シャム）のチェンマイへ敗走する。そしてついに1945年8月15日（シャム）中部のバンダーラで終戦。同時に軍医大尉進級。捕虜。その後1946年4月詩集『孔雀の寺』をシャムの捕虜収容所（キャンプ）にて執筆している。

詩「精舎にて」は「石像の/半身獣の女の頬が/おもむろに無限の羞恥をうかべます」と敗戦の生き残りである作者の心情を、インド神話の下半身が鳥の女性神キンナリーの像に投影している。

詩「三姉妹」は「うららかな水の母体」と女性を形容し、三姉妹を「睡蓮」「鷺鳥」「敏捷な愛の素足」とたとえている。この女性たちは、おそらく従軍慰安婦と思われる。戦後25年目に出版された戦時回想エッセイ『月白の道』の復刊で1987年刊行された『月白の道』に加えられた「南の道」章でタイの国境近くの傷病兵中継所での見聞を次のように書いている。「あるときは、なまめかしい女性たちの声をかこんだ一群の兵士も通過してゆきました。泥まみれになって性のつとめを果たしてきた女たちを、なじみの兵隊たちが道案内するのでしょう。彼女たちの陽気さたくましさにはおどろくほかはありませんが、…」²

詩「森の舞踏」は「鄙びた舞踏の輪から/おまへを誘ひだしたは月天子/素朴なこの世の秘義を/おまへに教へたのは夜香樹」と月下の恋を幻想しているのであろうか、いずれにしてもとりあえず死の恐怖からは免れた安心感が表れている詩になっている。

この後丸山は、おそらくバンコクから日本に帰国し、1946年6月8日に帰郷した。

5 おわりに

以上、丸山豊の戦時詩集『孔雀の寺』を分析した。この詩集は戦後捕虜としてシャムで書かれた回想詩である4行詩28篇と、戦中現地で書かれた詩5篇が収められている。4行詩はすでに戦闘は終了した後で書かれていて、しかも形式を4行詩と整えているので、感情は抑制されていると思われる。原始其の儘の自然や素朴な生活を讃美したり、

2 『新訂増補月白の道』（創言社、1987年11月）

或いは仏教寺院のめずらしさをうたったりと異国情緒の表現も多い。また、戦中のモードである大東亜共栄圏思想へのシンパシーや戦友愛を表現したりしている。しかし、やはり随所に戦争への不安や忌避が多く書かれている。他の顕著な特徴としては、やはり女性への関心だろう。それらが4行詩の大まかな感想であるが、4行詩と異なり、特に雲南省での戦時詩は際立って激情が吐露され死への恐怖と絶望が表現されていたとまとめられる。

付記 詩集『孔雀の寺』の詩の引用文は、『定本 丸山豊全詩集』（創言社、1976年9月）からである。

1. 「盲目的な生命の意志」

全く、私、私、と、どれだけ私が、えらいんだ。そんなに、しよつちう私のことを考へてゐるなんて。

(「かめれおん日記」¹三)

「かめれおん日記」の「私」は「私」(自己)を希求する。この「自己」の探究には、次の部分に見られるような自身の考えが他者の借り物ばかりであるという実感が根底にある。

全くの所、私のものの見方といつたつて、どれだけ自分のほんものがあらうか。いそつぷの話に出て来るお洒落鴉。レヲパルディの羽を少し。ショペンハウエルの羽を少し。ルクレティウスの羽を少し。莊子や列子の羽を少し。モンテエニユの羽を少し。何といふ醜怪な鳥だ。

(「かめれおん日記」四)

このような「自己」が他者の考えの中に埋もれて消失してしまうことへの嘆きや揶揄が、作品内で繰り返される。そしてこの実感が恐れとして絶頂を迎えるのは、「自分の精神のあり方を此の上なく適切に説明してくれる」アミエルの文章を見たときである。

何とかしなければならぬ。これではどうにも仕様がな。このまゝでは、生きながらの立消だ。次第に俺は、俺といふ個人性を稀薄にして行つて、しまひには、俺といふ個人がなくなつて、人間一般に歸してしまひさうだぞ。冗

¹ 本論における中島敦の著作などの引用は『中島敦全集』1～3(筑摩書房、2001-2002年)からのものである。なお、全ての引用について傍点や圏点は省いた。また、下線は本論筆者によるものである。

「かめれおん日記」は『南島譚』(今日の問題社、1942年11月)が初出であるが、その原稿末尾欄外に「昭和十一年十二月」と日付が記されている。

談ぢやない。もつと我執をもて！ 我慾を！ 排他的に一つの事に迷ひ込むことが唯一の救ひだ。アミエルの乾物になるな。自分で自分のあり方を客觀的に見ようなどといふ・自然に悖つた不遜な眞似は止めろ。無反省に、づう／＼しく（それが自然への恭順だ）粗野な常識を尚び、盲目的な生命の意志にだけ従へ。

（「かめれおん日記」四）

ここでは、「俺といふ個人」を保持するための方法を語る中で「盲目的な生命の意志」という言葉が用いられている。この言葉はドイツの哲学者ショーペンハウアーに由来するものだろう。「かめれおん日記」においてショーペンハウアーの名前は、先に引用した部分に加え、第二章の冒頭で、

朝起きて見ると、カメレオンはゴムの木などには止らずに、机の下に滑り落ちた書物の上に乗つて、小さな眼孔から此方を見てゐた。思つたより元氣らしい。もつとも昨夕はかなり部屋を暖めたので、乾きすぎたせみか、私の方が少々咽喉を痛めた。カメレオンの乗つてゐた書物はショペンハウエルのパレルガ・ウント・パラリポメナ。

（「かめれおん日記」二）

と、かめれおんが乗っている本がショーペンハウアーの「パレルガ・ウント・パラリポメナ」（『余禄と補遺』）という形で出てくる。これは状況によって体の色を変化させるかめれおん同様、自身の見解を持てない自分がいかに「本」という他者の思想に寄りかかっているかということを暗示しているかのようなものである。そうすると先の「盲目的な生命の意志」という言葉も、ショーペンハウアーからの表層的な借り物に過ぎないということになる。確かにショーペンハウアーが〈意志〉を最終的に止揚すべきものとして否定的に捉えているのに対して、ここでは他者（本の知識）の中に埋もれてしまいそうな「自己」の存在を実感するために「盲目的な生命の意志」という言葉を使用し、積極的なものとして捉えているという違いがある。

一方でここでの「盲目的な生命の意志」は中島敦の「自己」に対する考えと、ショーペンハウアーの〈意志〉の哲学のつながりが示唆されているとも考えられる。中島敦にとって、ショーペンハウアーの哲学は自らを飾るための借り物の「羽」に過ぎないのか否か。本稿はこの点について検証していく。

2. 中島敦のショーペンハウアー読書と言及

『日本大学法学部 所蔵 中島敦文庫目録』²には、ショーペンハウアーの書物として、以下の二件がある。

- ① フロイド「精神分析」・ショーペンハウエル「論文集」
(世界大思想全集(一期) 春秋社、昭和4年)
- ② A Phorismen zur Lebensweisheit A. Schopenhauer Philipp reclam jun.

①には『余禄と補遺』(*Parerga und Paralipomena*)の一部と主著『意志と表象としての世界』(*Die Welt als Wille und Vorstellung*)の第二巻が部分的に掲載されている。『日本大学法学部 所蔵 中島敦文庫目録』によると線引きがあるらしく、読んだものと推測される。②は「生活の知恵のためのアフォリズム」で、一般に「幸福について」の題名で知られる、『余禄と補遺』の一部である。

また、関連として次のものがある。

- ③ ジンメル『ショペンハウエルとニイチェ』(藤野渉訳、岩波書店、昭和17年)

これは岩波文庫である。『日本大学法学部 所蔵 中島敦文庫目録』には線引きなどの情報がなく、読んだのかは定かではない。だが、中島敦が後々までも一定の関心を持ち続けたことがうかがえる。

中島敦のショーペンハウアーへの言及はいくつかあるが、その読書のあとを考える上で次の二点が明確である。

ショペンハウエルによれば、読書とは、自ら思索する労を避けて、その代り他人の思索の跡を辿ることであり、獨創的な人間の選ばざる所だといふ。
(「旅の手帖から」³「書物」)

これは上記の①(ショーペンハウエル「論文集」)の「読書と書籍」「自ら考ふることについて」にその内容があり、『余禄と補遺』の一部である。

また、「かめれおん日記」のもととなったと考えられる「無題」⁴に、

² 日本大学法学部図書館、1980年11月

³ 初出は「南洋群島」二月号(1942年2月)。

⁴ 生前未発表。

——商賣敵の憎悪嫉視は、男子にあつては、同じ商賣に従事してゐる者同士の間にも限られてゐるが、婦人は此の感情を、他の凡ての女性に対して抱くのである。何となれば、彼女達は皆、唯一つの商賣——種屬維持の爲に男性を獲得するといふ、唯一つの同じ商賣に従事してゐるのだから。——

これはショペンハウエルの言葉だと、あとに註がつけてある。

(「無題」二)

とあり、これも同書の「婦人論」にその内容があり、『余禄と補遺』の一部である。

このように『余禄と補遺』を少なくとも部分的に読んでいることはわかるが、では主著である『意志と表象としての世界』についてはどうか。蔵書になく不明な点も大きいが、おそらく読んでいたと考えられる。

すでに佐々木充氏が指摘している⁵ように「悟浄出世」⁶の沙虹隱士が語る内容は、ショーペンハウアーの哲学の大まかな輪郭を踏まえたものとなっている。

「世はなべて空しい。この世に何か一つでも善きことがあるか。もし有りとせば、それは、此の世の終がいつかは来るであらうことだけぢや。別にむづかしい理窟を考へる迄もない。我々の身の廻りを見るがよい。絶えざる變轉、不安、懊惱、恐怖、幻滅、鬭争、倦怠。方に昏々昧々紛々若々として歸する所を知らぬ。我々は現在といふ瞬間の上にだけ立つて生きてゐる。しかも其の脚下の現在は、直ちに消えて過去となる。次の瞬間も又次の瞬間も其の通り。丁度崩れ易い砂の斜面に立つ旅人の足許が一足毎に崩れ去るやうだ。我々は何處に安んじたら良いのだ。停らうとすれば倒れぬ譯に行かぬ故、やむを得ず走り下り續けてゐるのが我々の生ぢや。幸福だと？ そんなものは空想の概念だけで、決して、或る現實的な状態をいふものではない。果敢ない希望が、名前を得たゞけのものぢや。」

(「悟浄出世」三)

「自己だと？ 世界だと？ 自己を外にして客觀世界など、在と思ふのか。世界とはな、自己が時間と空間との間に投射した幻ぢや。自己が死ねば世界

⁵ 佐々木充「『わが西遊記』の方法——その二・「悟浄出世」の方法意識」(「帯広大谷短期大学紀要」1968年7月)の末尾にある「前稿補訂」(二)

⁶ 初出は『南島譚』。1942年6月頃に脱稿したと推測されている。

は消滅しますわい。」

(「悟淨出世」三)

ショーペンハウアーの哲学においては、物自体としての〈意志〉のみが根本の存在であり、「客観世界」は主観が生み出す〈表象〉に過ぎず⁷、〈時間〉はその表象としての世界における認識の形式にすぎない⁸。そのため過去や未来はただ概念の中にあるのみで、瞬間瞬間に消滅していく「現在」⁹のみが「生の形式」となる¹⁰。それゆえに、「現在」を超えた理想が価値を持つことなく、〈意志〉が満た

⁷ 以下、ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』の該当部分を掲げる。なお、括弧内には該当する巻と節とともに、『ショーペンハウアー全集』（白水社、1972-1975年）の巻数とページ数を示す。

「すなわちこの世界の全体は、主観と関係している客観であるにすぎず、直観する者の直観であり、一言でいえば表象である。」（第1巻 第1節、②46）

⁸ 「あらゆる客観の本質的な、したがって普遍的な形式は、時間、空間および因果性であるが、それらは客観そのものの認識がなくても、主観から出発することによって発見することができ、また完全に認識することができる。すなわちカントの言葉でいえば、われれの意識のうちにア・プリオリに存する。」（第1巻 第3節、②49）

⁹ 「時間においては各瞬間が、先行する瞬間つまり自分の父を抹殺したかぎりにおいてのみ存在し、そして自分自身も同様にたちまち抹殺されてゆくのである。」（第1巻 第3節、②52）

「人間の現存はこのように、ただ形式的な側面から考察しただけでも、現在が死んだ過去のなかへとたえず押しよせてゆくことであり、たえず死んでゆくことなのである。さてこのことを身体的な側面からも正視してみよう。そうすれば次のことが明らかになる。周知のように、われわれが歩くということは、転倒するのがたえず阻止されているということであるにすぎない。われわれの肉体が生きているということは、死ぬのがひきつづいて阻止されているということであり、死がいつも猶予されているということなのである。」（第4巻 第57節、③239-240）

¹⁰ 「意志の現象の形式、それゆえに生ないし実在性の形式は、ほんらいただ現在だけであり、未来でもなく過去でもない。未来や過去はただ概念のなかだけに現存するのであり、（中略）いかなる人間も過去のうちに生きたことはなく、だれも未来のうちに生きはしないであろう。現在のみがあらゆる生の形式なのである。」（第4巻 第54節、③183）

されるか否かという〈快／苦〉が絶対的な価値を持つ¹¹。この〈意志〉に現存在は絶え間なく追い立てられているのである¹²が、この〈意志〉は完全に満たされるということはないため¹³、「苦」こそが積極的なものとなり、「快」は「苦」の消失という消極的な役割を果たすだけのものとして位置づけられる¹⁴。

そしてショーペンハウアーが最終的な境地として求めるのが、「意志」を断絶することである。沙虹隱士は次のように語っている。

「だが、若い者よ。さう懼れることはない。浪にさらはれる者は溺れるが、浪に乗る者は之を越えることが出来る。此の有爲轉變をのり超えて不壊不動の境地に到ることも出来ぬではない。古の眞人は、能く是非を超え善惡を超え、我を忘れ物を忘れ、不死不生の域に達してをつたのぢや。が、昔から言はれてをるやうに、さういう境地が楽しいものだと思うたら、大間違ひ。苦しみも無い代わりには、普通の生ものの有つ樂みも無い。無味、無色。誠に味氣ないこと蠟の如く砂の如しぢや。」

（「悟淨出世」三）

本来〈意志〉に奉仕する認識が、「芸術」によって純粋な認識作用なることで、一時的に「苦」からの逃避が可能になる¹⁵が、それを永続的に克服するには意志

¹¹ 「他方このことに対応して、身体への作用はいずれも、ただちにかつ直接的に意志への作用でもある。この作用はそうしたものとして、意志に逆らう場合は苦痛とよばれ、意志に応じる場合は快感、快樂とよばれる。」（第2巻 第18節、②198-199）

¹² 「人間の全本質は意欲と努力であり、いやすことのできない渴きにまったくたとえることができる。」（第4巻 第57節、③240）

¹³ 「これらの現象は絶えまのない苦しみのただなかにあり、永続する幸福をもたないということを見てとる。なぜならば、あらゆる努力は欠乏から、おのれのおかれた状態に対する不満から発生するのであり、それが満たされないかぎりは苦しみとなるからである。とはいえ、どんな満足でも永続はせず、むしろたえず新しい努力の出発点となるにすぎない。」（第4巻 第56節、③237）

¹⁴ 「あらゆる満足、あるいは一般に幸福とよばれているものは、もともと本質的につねに消極的であるにすぎず、断じて積極的ではない。（中略）こういうわけで、満足なりしあわせなりは、苦痛からの、窮迫からの解放以上のなにものでもありえない。」（第4巻 第58節、③254）

¹⁵ 「もろもろの客観を純粋に客観的に観察することへと高まることにより、わ

を否定せねばならない¹⁶。これは、宗教的な行為に見られる、欲求の遮断という形で説かれる¹⁷。そして根本的な存在である〈意志〉が消失することは、「無」に帰するということになる¹⁸。

以上の通り、この「悟淨出世」の沙虹隱士の語る内容は、ショーペンハウアーの認識論や〈意志〉の哲学と深いつながりのあるものとなっている。中島敦がショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』の根本思想と大枠をつかんでいたことは間違いない。

れわれ自身ではなくてただこれらの客観だけがまのあたりにあるのだという幻想を生みだすことができるようになるやいなや、われわれは遠く隔たった客観によるのとまったく同じように、まのあたりの客観によっても、あらゆる苦しみから脱れることができる。そのときわれわれは苦しむ自己の苦しみを脱し、認識作用の純粋な主観としてそれらの客観とまったく一体となる。」(第3巻 第38節、③55-56)

¹⁶ 「全体の認識、物自体の本質の認識は、あらゆる意欲の、意欲すべての鎮静剤となるのである。いまや意志は生にそむいている。意志はいまでは生のもろもろの享受を考えるとぞっとする。それらの享受のなかに意志はおのれの肯定を認めるからである。こうした人間は、自発的な断念、諦念、真実の放下、全面的な意志の滅却の状態に到達しているのである。」(第4巻 第68節、③354)

¹⁷ 「それゆえおそらくここではじめて聖域、自己否認、我意の絶滅、禁欲の内的な本質が、あらゆる神話的なものを捨象しかつそれから純化されて、生への意志の否定として言い表され登場していることになるであろう。生への意志の否定として登場するのは、生への意志にとって、おのれ自身の本質の認識を完成したものがあらゆる意欲の鎮静剤となったあとのことである。ところが前述のような聖者や苦行者たちは、みなこの本質を直接に認識し、行為を通して表明したのである。」(第4巻 第68節、③360-361)

¹⁸ 「つまり世界がそこで成り立ちそれによって成り立つ客体性のあらゆる段階にわたって、目標もなく休みもないあの不断の切迫や衝動が廃棄され。段階を追って出てくる諸形式の多様性が廃棄され、意志とともにその現象全体が廃棄され、ついにはこの現象の普遍的な形式である時間・空間も、さらにまたその現象の根本形式である主観と客観までも廃棄されるのである。意志がないなら、表象もなく世界もない。／われわれのまえに残るのはもちろん無だけである。」(第4巻 第71節、③403-404)

3 「盲目的な生命の意志」に従うこと

自分で自分のあり方を客観的に見ようなどといふ・自然に悖つた不遜な眞似は止める。無反省に、づう／＼しく（それが自然への恭順だ）粗野な常識を尚び、盲目的な生命の意志にだけ従へ。

（「かめれおん日記」四）

先に見たように、ショーペンハウアーの哲学は「認識」よりも〈意志〉を根源的なものとするものであり、ここでの「客観的に見よう」という「認識」を忌避するという点に重なるものがある。そしてここでの「無反省に、づう／＼しく（それが自然への恭順だ）粗野な常識を尚び」という部分について、これは「私」が吉田という男を「此の男は何時も、人間は——或ひは、生物は——斯く生くべし、と、私に教へて呉れるのだ。」として模範と捉えていることと、その意味するものは同じである。吉田とは

私とほゞ同年だが、全く此の男程精力絶倫で思ひ切り實用向きで、恥も外聞もなく物質的で、懷疑、羞恥、「てれる」などといふ氣持と縁の遠い人間を私は知らない。疲れる事を知らぬ働き手。有能な事務家。方法論の大家。（本質論など悪魔に喰はれてしまへ！）常に勇氣凜々たる偏見に充ち満ちて、あらゆる事に勇往邁進する男。

（「かめれおん日記」二）

と説明される人物である。吉田を揶揄する調子が感じられるものの、この吉田を「私」が模範とするのは、「思ひ切り實用向き」や「あらゆる事に勇往邁進する」という言葉が示すように、認識したり考えたりすることをやめ、行動を希求するためである。そしてこの点は、「悟淨歎異」の悟淨が悟空と自身を比較して

俺みたいな者は、何時何處の世に生れても、結局は、調節者、忠告者、觀測者にとどまるのだらうか。決して行動者には成れないのだらうか？

（「悟淨歎異」¹⁹）

とする嘆きに共通するものがある。またこの引用部分の後にある「自由な行爲とは、どうしてもそれをせずにはゐられないものが内に熟して來て、自づと外に現

¹⁹ 初出は『南島譚』。

れる行為の謂だ」というのは、ショーペンハウアーが〈意志〉こそを自由とする考えと重なる²⁰。つまり「盲目的な生命の意志」に従うことは、吉田のような行動者になることなのである。「自己」の消失を恐れる「私」が「盲目的な生命の意志」に従おうとすることには、行動することが「自己」の保持や開示へとつながるという発想がある。

では、このような「自己」と行動という点について、ショーペンハウアーの哲学はどのように位置づけているだろうか。

ショーペンハウアーにとってあらゆるものの根底にあるのが〈意志〉であり、人間においてはその〈意志〉が何を欲するのかという「性格」が根源的なものとなる²¹。また認識は二次的なものであるため、この「性格」を変えることは無く、「性格」は不変のものとされる²²。むしろ、欲求こそが認識を形成する²³。しかしこの物自体である〈意志〉を直接認識することは原理上できない。人間が認識できるのは、根源的な〈意志〉と同一のものである「身体」であり²⁴、その現象

²⁰ 「どんな事物でも、現象であり客観であるかぎりでは、どこまでも必然的である。この同じ事物が、自体としては意志である。そしてこの意志は未来永劫にわたって完全に自由である。」（第4巻第55章、③198-199）

²¹ 「どんな人間でも、いま彼がそれであるものになったのは彼の意志によってであり、彼の性格こそ根源的なのである。彼の本質の土台をなすのは意欲であるからである。」（第4巻第55章、③208）

²² 「人間というものは変化するものではなく、人間の生涯と行状すなわちその経験的な性格は叡智的な性格の展開されたものであり、すでに子供のときからみとめられるもろもろの変えられない素質が明確に発展したものであるにすぎず、こういうわけで、いわば生まれたときすでに人間の行状は確実に定められており、終末にいたるまで本質的にはどこまでも等しいままであるという洞察から出てきたものである。」（第4巻第55章、③209）

「人間がもともと欲しており一般に欲しているもの、彼が最も奥底の本質の努力やこの努力に応じて彼が追う目標、こうしたものをわれわれは外からの働きかけによっても、教化によっても、けっして変えることはできない。」（第4巻第55章、③210-211）

²³ 「古くからある見解では、人間はおのれが認識するものを欲する。わたしの場合では、人間はおのれが欲するものを認識するのである。」（第4巻第55章、③208）

²⁴ 「意志の働きと身体の活動とは、因果のきずなで結ばれて客観的に認識された二つの異なる状態ではない。それらは原因・結果という関係にはなく、一にして同じものであり、ただまったく異なった仕方であたえられているだけであ

たる活動である²⁵。つまり人間は、自らの根元たる「性格」を自らの思いや願いではなく、行動から認識するしかすべはないのである²⁶。行為こそが、本当の自分を教えてくれる²⁷。

このショーペンハウアーの「自己」観から次の二点が帰結される。

- ① 根源に変わらない「自己」が存在し、周囲の環境はその「自己」を変革するものではなく、「自己」こそが認識する世界を形成する。
- ② 「自己」を直接に認識することは不可能であり、あくまでも「身体」を通して、つまり行動によって「自己」が見出される。

これらの点について、中島敦の他の作品を視野に共通する点を考えていく。

あくまでも根底に変わらない「自己」があるという認識は、しばしば中島敦の主題とされる「狼疾」、自己の愚かさへの認識と結びつく。明確なのは、「狼疾記」の次の部分である。

「畢竟、俺は俺の愚かさに殉ずる外に途は無いちやないか。凡てが言はれ、考へられた後に結局、人は己が性情の指さす所に従ふのだ。その論議・思考と無關係に、である。そして爾後の努力は、凡て、其の性情の爲した選択へのジャスティフィケーションにのみ注がれるであらう。考へ様によれば、古往今來のあらゆる思想とは、各思想家がそれ／＼自己の性情に向つて爲した

る。」(第2巻 第18節、②197-198)

²⁵ 「意欲と行為は反省のなかだけ区別されるが、現実においてはそれらは一つである。まがいものでない純粹にして直接的な意志の働きはいずれも、ただちにかつ直接的に身体に現象する働きでもある。」(第2巻 第18節、②198)

²⁶ 「人間はあれやこれやのものであらうと決心することもできず、別人になることもできない。彼はこのひとたび存在するのであり、おのれが何であるかを引きつづいて認識するのである。」(第4巻 第55章、③208)

「結局のところ人間の場合、おのれ自身にとっても他の人びとにとっても、自分の性格のしるしとして通用するのは、ひとえに決心であつて、単なる願ひではない。ところで決心というものは、おのれ自身にとっても他の人びとにとっても、ただ行為をとおしてのみ確實となる。」(第4巻 第55章、③220)

²⁷ 「これらの行為は性格の写しであり、意志の鏡であるということから出てくる。この鏡をながめて、われわれはおのれのいちばん奥の自己を、おのれの意志の中核を認識するのである。」(第4巻 第55章、③225)

ジャスティフィケーションに外ならぬではないか。……」

（「狼疾記」²⁸一）

認識が変えることのできない〈意志〉によって、「自己」が決まっているというのがショーペンハウアーの思想である。同様にここからは「議論」や「思考」が「己が性情」という根底的な「性格」に決定的な影響を及ぼすことはないという思考が読みとれる。むしろ認識が生み出す「表象」が、欲求に基づいて生み出されるように、根源的な「自己の性情」こそが全てを決定し、「論議・思考」はそれに準じて世界を創り出すに過ぎないものとされている。

ただしこのような「自己」は「物自体」であるために認識することはできず、現象となって初めて認識される。つまり、行動という現実化の後に「自己」が見出されるのである。これは、自己認識が必然的に「遅れ」の感覚を伴ったものとなることを意味する。「自己」が「存在」した後に、はじめて「自己」を認識できるのである。そのような例を中島敦の作品に探れば、次の「山月記」の場面が典型的なものと言える。

人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に當るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに變へて了つたのだ。今思へば、全く、己は、己の有つてゐた僅かばかりの才能を空費して了つた譯だ。人生は何事をも爲さぬには餘りに長い、何事かを爲すには餘りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、**事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭ふ怠惰とが己の凡てだつたのだ。**己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもゐるのだ。**虎と成り果てた今、己は漸くそれに氣が付いた。**

（「山月記」²⁹）

本来先行し、行動を決定しているはずの「自己」が、行動という現実化の後に「漸くそれに氣が付いた」と「遅れ」も感覚を伴った形で発見される。重要なのはその「自己」像が正確なものか否かではない。そのような形で見出されたもの

²⁸ 初出は『南島譚』。原稿末尾に「昭和十一年十一月」の記述があるが、抹消されている。

²⁹ 初出は「文学界」昭和十七年二月号（1942年2月）。

を、本来の「自己」として捉える発想である。

同様に「李陵」においても、

李陵は己と友とを隔てる根本的なものにぶつかつていやでも己自身に対する暗い懷疑に追ひやられざるをえないのである。

(「李陵」³⁰三)

とある。ここで李陵が見つめねばならないのは自身と蘇武の思いや願望の違いではなく行動の違いである。本当の自分として李陵につきつけられるのは、ありたいと願った「自己」像ではなく、自らの行動を通して立ち上がる「自己」像である。

以上、「かめれおん日記」の「盲目的な生命の意志」を手掛かりに、中島敦の「自己」観とショーペンハウアーの〈意志〉の哲学のつながりを考察した。中島敦にとって、ショーペンハウアーの哲学は単なる飾りではなく、後年の作品にも表れるような問題意識と共鳴するものであり、小説作品を読み解く上で何らかの手掛かりを与える可能性がある。

³⁰ 作者の没後、「文学界」昭和十八年七月号（1943年7月）に原稿を整理して発表された。

矢原礼三郎——経歴及び著作目録（増補改訂版）

与 小 田 隆 一

矢原礼三郎の「越境」——解題に代えて

矢原礼三郎（1915-1948）は、日本の租借地であった関東州旅順で製塩業「矢原商会」を営む父重吉の三男として誕生した。比較的恵まれた環境に育った矢原は、旅順中学在学時から詩作を開始、1932年、矢原の旅順中学の先輩にあたる北川冬彦（1900-1990）らを中心に文芸雑誌「麵包」が東京で創刊されると、旅順在住の矢原もその同人として参加し、同誌を中心に、数多くの詩を発表した。

中国語に堪能であった矢原は、1930年代当時の中国詩壇の状況、特に詩歌による民族意識の高揚を旨とする「国防詩歌」に多大な関心を抱いていたようで、その後1940年代にかけて自らと親交のあった「国防詩人」臧克家（1905-2004）を始めとする中国詩人の作品の翻訳を手がけたほか、同じく「国防詩人」の一人である邵冠祥（1916-1937）の主宰する雑誌「海風」にも中国語詩を発表するなど、基本的に日本詩壇に身を置きつつも中国詩壇へ向けての「越境」を積極的に試みた人物でもあった。

また矢原は1930年代から40年代にかけての中国映画界の事情にも精通しており、中国映画に関する日中両国語による評論を数多く残しているほか、1938年には入社したばかりの満洲映画協会（満映）で映画「七巧図」の監督も務めており、その当時における有数の中国映画通だったともいえよう。

その生涯の大半を戦前の中国大陆で過ごし、東京へ引き揚げ後も再度中国への渡航を企図していた矢原は、実質的に日本と中国という二つの祖国を持ち、その二国間で絶え間なく「越境」を繰り返した人物であり、その詩は、日本国内に在住した時期のものも含め、殆どが中国大陆を舞台としたものである。「外地」である「満洲国」をも含めた広い意味での日本詩壇と、中国現代詩壇との関わりという点から見れば、両者の接点ともいうべき位置に立っていた矢原という人物は、正にこの論文集の表題である「越境」という言葉に相応しい一つの興味深い研究対象である。

ただ、矢原は詩誌、新聞文芸欄への掲載という形で詩、訳詩を残しながら、個人詩集は存在せず、まとまった伝記資料もなかった。そこで、その空白を補うべく、矢原が同人として参加した文芸雑誌や「満洲国」の日本語紙などから得られた断片的な情報を集

めて作成したのが、久留米大学紀要国際文化学科篇第 25 号（2008 年）に掲載された「矢原礼三郎一経歴及び著作目録」であった。

その後「満洲浪漫」同人に加わった 1938 年以降のものを中心に、詩歌、評論等数十篇の著作を発見した。特に前回の目録ではごく少数にとどまっていた南京在住時（1939-1942）の著作、ほぼ空白であった戦後の著作についてもある程度補充することができた。

また経歴に関しても、より詳細な情報を集めることができた。特に前回の資料では特定できていなかった没年についても、富山の地方文芸誌「高志人」に掲載された訃報記事の発見により、1948 年 1 月 7 日に没したことが判明し、また旅順中学同窓会誌の消息記事により、中国への再渡航を目前に控えての急逝であったことも判明した。

以上のように前回の資料から年数が経過し、追加すべき情報がかなりの量に達したため、今回この「増補改訂版」を作成することとした。

凡例

1. 各年ごとに、その年における矢原の動向、その年に発表された著作の順に配列する。
2. 著作の配列については、掲載紙誌の発行日順とする。月刊誌等で詳細な日付が不明なものは、その月の最後に配列する。
3. 掲載紙誌については、当該著作の初出のものに限り、他紙誌への転載については省略する。
4. 下記の詩については、いずれも題名は同じであるが、内容の全く異なる別の詩であるため、両方とも目録に配列する。
「夜」、「女」、「白河沿岸」、「冬」、「河抄」
5. 題名の前に＊を付けたものは、中国語による著作であることを示す。
6. 「麵麴」掲載の随筆のうち、無題のものは内容の冒頭の部分を示す。また、同誌「文学仲間」欄に掲載のものは、「文学仲間」を題名とする。
7. 経歴については、主に下記の資料を参照した。
 - A 新聞：「満洲日日新聞」、「大新京日報」、「満洲新聞」、「大陸新報」（国立国会図書館所蔵のマイクロフィルム）
 - B 雑誌：「麵麴」（日本近代文学館、神奈川近代文学館所蔵）、「鵲」、「文芸汎論」（いずれも日本近代文学館所蔵）、「九州芸術」（北九州市立中央図書館所蔵）、「満洲映画」日文版及び満文版（国立国会図書館、早稲田大学演劇博物館所蔵）、「キネ

マ旬報」、「映画評論」、「映画の友」、「映画史研究」（いずれも国立国会図書館所蔵）、
「満洲浪漫」（国立国会図書館関西館所蔵）「映画集団」、「高志人」（いずれも国立国会図書館所蔵デジタル資料）

C その他：那須清編『北京同学会の回想』 不二出版 1995年

北村謙次郎『北辺慕情記』 大学書房 1960年

大内隆雄『満洲文学二十年』 国民画報社 1944年

『中支建設資料整備委員会業務概況』 同委員会 1941年

劉正忠「芸術自主と民族大義：『紀弦為文化漢奸説』新探」 「政大中文學報」第11期 2009年6月

木家勇「本の行方」 「徬書月刊」第5巻第2号 1990年

「桜桂同胞会会報」第20輯 1936年

旅順中学校桜桂会六十周年記念号編集委員会・編「桜桂会誌：六十周年記念号 1969」1970年

北村謙次郎「寛城子にて」『大陸の相貌』（満洲日日新聞社・大連日日新聞社 1941年）所収

須田満「高島高と翁久允－『高志人』『高志』関連資料」公益財団法人翁久允財団 2021年

1915年（大正4年） 旅順

◆ 製塩業「矢原商会」を営む父・重吉の三男として関東州旅順市巖島町に生まれる。

1928年（昭和3年） 旅順

◆ 長兄・清市郎（第15回生）、次兄・遼二郎（第18回生）に続き、旅順中学（第21回生）入学、同校の先輩である詩人・北川冬彦の影響を受け在学中より詩作を開始。

1932年（昭和7年） 旅順

◆ 11月 「麵麴」（東京）創刊、同誌同人に参加。

(著作)

山脈の詩(詩歌)	東京「麵包」第1巻第1号	1
1月 1日		
光の詩(詩歌)	同 上	
夕暮の詩(詩歌)	同 上	
冬の詩(詩歌)	同 上	
ある日の詩(詩歌)	同 上	
小路の詩(詩歌)	同 上	
兵(詩歌)	「麵包」第1巻第2号	1
2月 1日		
文学仲間(随筆)	同 上	

1933年(昭和8年) 旅順→東京

◆ 2月 旅順中学卒業、官立東京外国語学校支那語科に入学。

(著作)

文学仲間(随筆)	「麵包」第2巻第1号	2
月 1日		
城壁(詩歌)	「麵包」第2巻第2号	3
月 1日		
文学仲間(随筆)	同 上	
夜(詩歌)	「麵包」第2巻第3号	4
月 1日		
蒙古犬(詩歌)	同 上	
凍港(詩歌)	「麵包」第2巻第4号	5
月 1日		
驢馬(詩歌)	同 上	
姑娘(詩歌)	同 上	
朱廟(詩歌)	同 上	
無題－畏友近藤綺十郎氏へ(詩歌)	同 上	
無題(「はじめて...」)(随筆)	同 上	

無題（「近く氏の…」）（随筆）	同	上	
天山南路（詩歌）			「麵麴」第2巻第5号
6月 1日			
飯店（詩歌）	同	上	
春（詩歌）	同	上	
焦燥（詩歌）	同	上	
待望（詩歌）			「麵麴」第2巻第6号
7月 1日			
砂原（詩歌）	同	上	
城街（詩歌）	同	上	
鉄道の夢（詩歌）			「麵麴」第2巻第7号
8月 1日			
海拉爾での日記（詩歌）	同	上	
煤けた船室（詩歌）	同	上	
書物（詩歌）	同	上	
晩春（詩歌）	同	上	
無題（「今僕が…」）（随筆）	同	上	
無題（「詩の表現…」）（随筆）	同	上	
復活の章（詩歌）			「麵麴」第2巻第8号
9月 1日			
ト居（詩歌）	同	上	
病室（詩歌）	同	上	
武器（詩歌）	同	上	
炎暑（詩歌）	同	上	
戦跡（詩歌）	同	上	
微痾（詩歌）	同	上	
文学仲間（随筆）	同	上	
哨船から（詩歌）			「麵麴」第2巻第9号 1
0月 1日			
朔北（詩歌）	同	上	
弔砲（詩歌）	同	上	
王墨林と呼ばれた男（詩歌）	同	上	
無題（「先輩の詩型を…」）（随筆）	同	上	

文学仲間（随筆）	同 上	
部落（詩歌）	「麵包」第2巻第10号	1
1月 1日		
挽歌（詩歌）	同 上	
帰街（詩歌）	同 上	
秋ばんだ丘（詩歌）	同 上	
遊戯（詩歌）	同 上	
無題（「嘗て僕は…」）（随筆）	同 上	
文学仲間（随筆）	同 上	
追悼（詩歌）	東京「生理」第3冊	1
1月 1日		
租界地（詩歌）	「麵包」第2巻第11号	1
2月 1日		
女（詩歌）	同 上	
夜行（詩歌）	同 上	
朝（詩歌）	同 上	
言葉のデッサン（詩歌）	同 上	
無題（「最近僕は…」）（随筆）	同 上	

1934年（昭和9年） 東京→旅順

- ◆ 春 東京外国語学校を卒業（中退？）
- ◆ 5月末 北川冬彦とともに日本留学中の中国女優王瑩に面会。
- ◆ 6月 東京を離れ、旅順に戻る。
- ◆ 7－8月頃 「九州芸術」（福岡）同人に参加。9月の同誌第1年2冊に詩2篇を
発表。
- ◆ 10月頃 「九州芸術」同人より除名される（理由不詳）。
- ◆ 12月 「麵包」同人より脱退。

（著作）

冬（詩歌）	「麵包」第3巻第1号	1月 1日
臨終（詩歌）	同 上	

リトマス試験紙（詩歌）	同	上		
記念日（詩歌）	同	上		
海（詩歌）	同	上		
書簡（随筆）	同	上		
文学仲間（随筆）	同	上		
落日の方（詩歌）	「麵包」第3巻第2号		2月	1日
或る日（詩歌）	同	上		
女（詩歌）	同	上		
平原（詩歌）	同	上		
初恋（詩歌）	同	上		
文学仲間（随筆）	同	上		
夕暮（詩歌）	「麵包」第3巻第3号		3月	1日
冬晴（詩歌）	同	上		
雪をなめる（詩歌）	同	上		
冬の咳 春の咳（詩歌）	同	上		
入浴（詩歌）	同	上		
「詩精神」の詩その他（評論）	同	上		
随筆（随筆）	同	上		
合唱（詩歌）	「麵包」第3巻第4号		4月	1日
白い家（詩歌）	同	上		
列車の歌（詩歌）	東京「記録」4月号			4月
四月の晚餐（詩歌）	「麵包」第3巻第5号		5月	1日
花（詩歌）	同	上		
夜（詩歌）	「麵包」第3巻第6号		6月	1日
夢（詩歌）	「記録」6月号			6月
岩塩に就いて（詩歌）	「麵包」第3巻第7号		7月	1日
真昼の海（詩歌）	同	上		
思ひ出（詩歌）	「麵包」第3巻第8号		8月	1日
失意（詩歌）	同	上		
白河沿岸（詩歌）	「麵包」第3巻第9号		9月	1日
夏（詩歌）	同	上		
シェイワ ン 戲院（詩歌）	同	上		

百貨店（詩歌）	福岡「九州芸術」第1年第2冊	9月20日
昼（詩歌）	同 上	
居留地の入口（詩歌）	「麵麴」第3巻第10号	10月 1日
花市抄（詩歌）	同 上	
競馬場－王瑩さんへ（詩歌）	同 上	

1935年（昭和10年） 旅順

- ◆ 10月 「麵麴」第4巻第10号より同誌同人に復帰。

（著作）

沿海地方（詩歌）	大阪「日本詩壇」第3巻第5号	5月 1日
Nopm Apmvp（詩歌）	「麵麴」第4巻第10号	10月 1日
出発（詩歌）	「麵麴」第4巻第12号	12月 1日
水葬（詩歌）	同 上	
鶉（詩歌）	同 上	

1936年（昭和11年） 旅順→北平

- ◆ 1月 「鶉」（大連）第7号より同誌同人に参加。
- ◆ 1月－2月頃 北平に「遊学」、約2年間滞在し、北平同学会語学校にて北京語を習得。
- ◆ 7月 同月の「鶉」第10号によれば、当時北平洋溢胡同（東単交差点東南角一筋目、現存せず）46号の「俄人大樓」に居住。
- ◆ 8月 旅順の実家に帰省。
- ◆ この頃北京「北平晨報」、天津「庸報」等の中国語紙に中国語による評論、中国語口語詩等を発表。（但し具体的作品については未確認。）
- ◆ この頃より中国詩人黄滢、臧克家らと交流。

（著作）

知らせ（詩歌）	大連「鶉」第7号	1月15日
---------	----------	-------

北平の歌（詩歌）	同	上	
少年（詩歌）	同	上	
国境（詩歌）	「麵麴」第5巻第2号		2月 1日
王城北平（詩歌）	同	上	
最近支那映画の動向（評論）	東京「キネマ旬報」第566号		2月11日
氷海（詩歌）	「麵麴」第5巻第3号		3月 1日
出帆（詩歌）	同	上	
冬（詩歌）	奉天「満州日日新聞」		3月 8日
深夜（詩歌）	「鵲」第8号		3月15日
珈琲店アストラリヤにて（詩歌）	同	上	
廃村（詩歌）	同	上	
教訓－或ひは晩春の歌－（詩歌）	大阪「会館芸術」第5巻第3号		3月
北平城外其他（隨筆）	「麵麴」第5巻第4号		4月 1日
馬車（詩歌）	同	上	
植民地の子供たち（詩歌）	同	上	
時計（詩歌）	「九州芸術」第3年第9冊		4月10日
黄土層（詩歌）	北平「黄土層」創刊号		4月15日
家郷（詩歌）	「鵲」第9号		5月15日
妹の歌－ある国際都市の秘話（詩歌）	同	上	
河抄（詩歌）	同	上	
北平夜色（詩歌）	「麵麴」第5巻第6号		6月 1日
暗合（詩歌）	同	上	
ある魚族（詩歌）	同	上	
城市断章（詩歌）	同	上	
帰葬（詩歌）	同	上	
都市風光（詩歌）	「鵲」第10号		7月15日
雷雨（詩歌）	同	上	
荒天（詩歌）	「麵麴」第5巻第9号		9月 1日
末裔（詩歌）	同	上	
河抄（詩歌）	同	上	
初秋の記録（詩歌）	「鵲」第11号		9月15日
時代の章－郭澄子へおくる（詩歌）	同	上	
帰（訳詩 卞之琳・作）	「麵麴」第5巻第10号		10月 1日

航海（訳詩 卞之琳・作）	同	上	
断章（訳詩 卞之琳・作）	同	上	
民謡（訳詩 臧克家・作）	同	上	
生命の叫び（訳詩 臧克家・作）	同	上	
元宵（訳詩 臧克家・作）	同	上	
訳者付記（評論）	同	上	
支那映画の魅力ー覚書風な（評論）	同	上	
海愁（詩歌）	同	上	付録
北平映画雑記（評論）	「キネマ旬報」第591号	10月21日	
山荘歌（詩歌）	東京「文芸汎論」第6巻第11号	11月 1日	
母に死別する歌（詩歌）	「鵲」第12号	11月15日	
望街（詩歌）	同	上	
北平だより（随筆）	「満州日日新聞」	11月19日（11月20日まで2回連載）	
十月号の読後感（随筆）	「文芸汎論」第6巻第12号	12月 1日	
わが故郷を語る（随筆）	同	上	
北平支部同胞会小記（随筆）	「桜桂同胞会会報」第20輯	12月25日	

1937年（昭和12年） 北平→東京→北平→新京

- ◆ 東京に一時帰国、4月6日に小津安二郎らを囲む映画関係者の座談会に出席。
- ◆ 4月－5月頃 「鵲」同人より脱退。
- ◆ 6月30日 満洲文話会結成とともに、同会に加入。
- ◆ 10月－11月頃 北平から新京に移り、満洲映画協会に入社、製作部に配属される。新京郊外寛城子のロシア人宅に下宿。
- ◆ 12月 満映映画「七巧図」の監督を担当、製作に入る。
- ◆ 12月 満映関係者とともに文芸同人誌「白想」の刊行計画に参画するも、実現には至らず。
- ◆ 同年発行の「東京外国語学校一覧」所収「生徒現員 専修科生 支那語二学年」の項に「矢原礼三郎（愛媛）」の記載あり。

（著作）

塞外地方（詩歌）	「麵麴」第6巻第1号	1月 1日
----------	------------	-------

残瀝（詩歌）	同	上	
帰郷歌（詩歌）	同	上	
北平初冬（詩歌）	同	上	
一笑ひ（訳詩 胡適・作）	同	上	
月夜（訳詩 胡適・作）	同	上	
一念（訳詩 胡適・作）	同	上	
十一月二十四日夜（訳詩 胡適・作）	同	上	
訳者付記（評論）	同	上	
離別歌（詩歌）	同	上	付録
朔旦（詩歌）	「鵲」第13号		1月15日
クリスマスの夜（詩歌）	同	上	
寄港地（詩歌）	同	上	
支那映画雑録－支那映画鑑賞の一方法（評論）	東京「映画評論」		1月号
城外（詩歌）	「麵麴」第6巻第2号		2月 1日
支那映画展望（評論）	「満州日日新聞」		2月17日（2月19日 まで3回連載）
*夜之記録（詩歌）	天津「海風」第1巻第5・6期合刊		3月20日
記憶の薄暮（詩歌）	「満州日日新聞」		5月18日
黄塵日記（詩歌）	「文芸汎論」第7巻第6号		6月 1日
支那映画界に於けるソヴェート映画的要素（評論）	「キネマ旬報」第613号		6月11日
故地（詩歌）	「麵麴」第6巻第6号		7月 1日
一日（詩歌）	同	上	
正午の夏（詩歌）	「満州日日新聞」		7月18日
辺塞哀愁（詩歌）	「麵麴」第6巻第8号		8月 1日
支那映画の新動向（評論）	同	上	
新しい映画批評の妙味（評論）	同	上	付録
午砲（詩歌）	「麵麴」第6巻第9号		9月 1日
小津安二郎のこと（評論）	同	上	付録
支那映画の精神（評論）	「映画評論」9月号		9月
喪失記（詩歌）	「文芸汎論」第7巻第10号		10月 1日
白河沿岸（詩歌）	「満州日日新聞」		10月 2日

塞北断章（詩歌）	「満州日日新聞」	10月 5日
北平春愁（詩歌）	「満州日日新聞」	10月 7日
麦雨の歌（詩歌）	「麵麴」第6巻第10号	11月 5日
日時計（詩歌）	同 上	
*由中国電影談到日本電影（評論）	新京「満洲映画」満文版創刊号	12月 1日
支那の映画女優（評論）	東京「映画の友」12月号	12月

1938年（昭和13年） 新京

◆ 10月 「満洲浪漫」（新京）創刊、同誌同人に参加。

（著作）

送別（訳詩 江岳浪・作）	「麵麴」第7巻第1号	1月 1日
車中（訳詩 邵冠祥・作）	同 上	
希望（訳詩 邵冠祥・作）	同 上	
時間（訳詩 邵冠祥・作）	同 上	
新京の夜（詩歌）	「満洲映画」日文版第2巻第2号	2月 1日
*略談満洲電影（評論）	「満洲映画」満文版第2巻第3号	3月 1日
ストーリー「七巧図」（翻訳 裕振民・作）	「満洲映画」日文版第2巻第3号	3月 1日
「七巧図」の主演俳優たち（随筆）	「満洲映画」日文版第2巻第5号	5月 1日
満洲映画に関するノート（評論）	「キネマ旬報」第646号	5月21日
黄昏前（詩歌）	新京「大新京日報」	7月14日
半島（詩歌）	「大新京日報」	7月21日
五月の風の中で－松本光庸氏に（詩歌）	「大新京日報」	8月13日
雨（詩歌）	「満洲映画」日文版第2巻第8号	9月 1日
霧宿（詩歌）	新京「満洲浪漫」第1輯	10月27日
支那サイレント映画の魅力（評論）	「映画評論」10月号	10月
チヨコレット 蘇哥刺の記憶（翻訳小説 葉靈鳳・作）	新京「満洲新聞」	
11月23日（11月25日まで2回連載）		
花の勲章（詩歌）	「満洲新聞」	11月27日

1939年（昭和14年） 新京→上海→南京

- ◆ 1月 「中支映画会社」（中華電影公司のことか？）入社のため上海へ。上海虹口地区崇智路の新上海ホテルに滞在。この間中日青年を網羅する文化連盟の設立を構想。
- ◆ 8月 中支建設資料整備事務所編訳部勤務のため南京へ。その後1942年3月まで同事務所調査員として中国語文献の翻訳等に従事。

（著作）

北方の人（詩歌）	「満州日日新聞」	1月27日
果物船（詩歌）	「満洲新聞」	3月21日
上海生活記（随筆）	「満州日日新聞」	4月28日
（5月5日まで5回連載）		

*日本的「中国電影迷」評「木蘭從軍」与「歌声淚痕」（評論）

	大阪「華文大阪毎日」第2巻第11号	6月 1日
支那映画界近状（評論）	「満洲映画」日文版第3巻第7号	7月 1日
*岳楓的新作「欲魔」（評論）	「華文大阪毎日」第3巻第1号	7月 1日
黄昏の訪問（詩歌）	「満洲浪漫」第3輯	7月23日
*文逸民的作品「神秘夫人」（評論）	「華文大阪毎日」第3巻第3号	8月 1日
李公館の朝餉－北京の思ひ出（詩歌）	「文芸汎論」第9巻第9号	9月 1日
昔話（詩歌）	「満洲新聞」	9月27日
上海の夏（随筆）	「文芸汎論」第9巻第10号	10月 1日
南京通信（随筆）	「満州日日新聞」	10月25日
（10月26日まで2回連載）		

支那水利関係資料目録（翻訳）	南京 中支建設資料整備委員会	11月25日
支那映画探求記（評論）	「映画評論」12月号	12月

1940年（昭和15年） 南京

（著作）

田園都市南京（随筆）	大連 「新天地」第20年第1号	1月 1日
淮史述要（翻訳）	中支建設資料整備委員会	3月
南京の巷にて（詩歌）	「満州日日新聞」	5月13日
新生活運動概観（翻訳）	中支建設資料整備委員会	5月
隣寸工業報告書（翻訳）	中支建設資料整備委員会	7月
国際連盟技術専門家水利調査報告書（翻訳）	中支建設資料整備委員会	11月

1941年（昭和16年） 南京

（著作）

農村の暮（訳詩 王亜平・作）	北川冬彦編『培養土』 山雅房	2月20日
夜の流浪者（訳詩 王亜平・作）	同 上	
都市の冬（訳詩 王亜平・作）	同 上	
支那各省農業労働雇傭習慣及需給状況（翻訳）	中支建設資料整備委員会	2月
元旦の哀愁（翻訳小説 魏麗都・作）	南京「中日文化」第1巻第1号	3月 1日
江西省経済事情（翻訳）	中支建設資料整備委員会	3月
南京早春（詩歌）	上海「大陸往来」第2巻第4号	4月 1日
興亜映画女優論 白光と王瑩 すくわれる平板性（評論）	上海「大陸新報」	
6月22日（夕刊）		
興亜映画女優論 榎芙佐子の顔 冷え冷えした清潔感（評論）	「大陸新報」	
6月24日（夕刊）		
興亜映画女優論 ハルビンで発見 美貌と美声の李燕芬（評論）	「大陸新報」	
6月25日（夕刊）		
興亜映画女優論 李燕芬の生活力 お白粉なしの美しさ（評論）	「大陸新報」	
6月26日（夕刊）		
邂逅（詩歌）	「大陸往来」第2巻第8号	8月 1日
支那映画圏の批評苑確立（評論）	「映画評論」11月号	11月

1942年（昭和17年） 南京→新京

- ◆ 3月 中支建設資料整備事務所解散。南京を離れ、新京の満洲映画協会に戻り、啓民映画部啓発課に勤務。

◆ 9月 この頃満洲詩人会（大連）に加入。

（著作）

煙台機船漁業論（翻訳）	中支建設資料整備委員会	3月
景風（詩歌）	「満洲新聞」	7月17日
記録（北京）（詩歌）	大連「満州詩人」第9号	9月 1日
海岸線（詩歌）	「満洲新聞」	9月 5日
支那映画の観点（評論）	「映画評論」10月号	10月
記憶（詩歌）	「満州詩人」第10号	11月 1日
大東亜戦争一周年譜（詩歌）	「満洲新聞」	12月 8日（朝刊）
満映作品への断想（評論）	「映画評論」12月号	12月

1943年（昭和18年） 新京→旅順（？）

◆ この頃胸を病み、旅順に帰郷、長兄清市郎宅に同居。

（著作）

水師營（詩歌）	「満州詩人」第11号	1月 1日
十年（詩歌）	新京「芸文」第2巻第2号	2月 1日
秋（詩歌）	撫順「断層」2月号	2月
その人－黄天始氏に（詩歌）	「満州詩人」第13号	5月 1日

1944年（昭和19年） 旅順→南京

◆ 現地召集を避けるため、この頃再び南京に戻り、中華電影公司に勤務。

◆ 上海在住の中国詩人路易士の主宰する詩誌「詩領土」に同人として参加。（但し同人名簿に名はあるものの、同誌への作品掲載はなし）

1945年（昭和20年） 南京（？）→上海（？）

◆ 動向、著作の有無ともに不明。

1946年（昭和21年） 上海→東京

◆ この頃までに上海から東京に引き揚げる。

◆ 10月26日 かつて「麴麴」の同人であった詩人高島高（「高志人」同人）を富山に訪ねる。

（著作）

光りに濡れて ―抗戦勝利後の南京にて（詩歌） 富山「高志人」第11巻第7号
10月15日

1947年（昭和22年） 東京

（著作）

中国映画界の現況（評論）	「キネマ旬報」再建第16号	7月15日
雪夜－高島高へ－（詩歌）	「高志人」第12巻第6号	8月10日

1948年（昭和23年） 東京

◆ 1月 中国大陆への再渡航を計画するも、出発直前の同月7日心臓発作のため東京の旅館にて急死。

（著作）

『中国の現代文化』「映画」の項（評論） 東京 中国研究所
9月30日

吉田勇輔油彩画500点・展を終えて

—「個展で展示された具象油彩画数508点」2025年2月日本記録樹立

吉田勇輔

138cm、芯を揃えた際の作品展示法、床からの高さである。一方作品間は40cmは無理だとしても30cmいや最低でも20cmは欲しい。しかし、久留米市美術館1Fの総壁面長は273m、如何ともし難い。計算上展示可能かと思われる10cmではどうしてもいやだと心が叫ぶ。作品鑑賞で視野の中に他の作品が介入することが赦せないのである。15cmでは、、、、それでもF0号、サムホールと呼ばれる小品は2段掛けを余儀なくされる。

「努力ではどうしようもないことはまず受け入れるべきである」という信条は永年の障害児教育に携わって学んだことの一つである。仕方がない。存在は本質に勝るのだ。そもそも500点の作品展示発案そのものに疑問が沸く。単なる思い付きではあるのだが、思えば昔から数学を大の苦手としながらも「数」そのものへの拘りは人一倍であった。登った山の高さはもとより、走った道の号線、下手をすると前の車のナンバーで語呂合わせを楽しむ自分がある。しかも、苦しい時に数を数える習慣を万人共通の感覚であると信じて疑わない。皆さんは幼い頃風呂の中で数を数えて上がったことはないだろうか。こじつけのようだがあの感覚は絵を仕上げる時の心境にも酷似している。記録は断じて目標ではない。本音を語ればマスコミが騒いでくれるのが真の狙いである。だとしたら「ギネス!？」と人は口にするが、つまらないことでかつてギネスを体験した私は、俗物の印象が強く、それが如何に大変か、またとんでもない費用が掛かるのではないかとの懸念もあり、選択肢から除外した。そもそもイギリスの当局とももちろん英語でやり取りせねばならず、問い合わせをした際にも返事を貰うまでに3か月を要した。知名度の低さはあるものの「日本記録認定協会」なる団体はそうではない。しかも非営利の公的機関である。ところが今回の企画実施で最も大きな難題に直面してしまった。私の企てが過去に事例がないことを自ら証明しなければならないのである。一見簡単な課題に思えるが、これが難航を極めた。美術関係の出版社、関係の出版物、全国美術

館協会（?）、作家連盟等々へのお尋ねを皮切りとして、最後はヤフー知恵袋にて世の中に問うてみた。それらの結果を克明に協会に報告し、次には証人を2人立てなければならない。この点で実行委員長を務めていただいた浦田義和氏には更なる尽力をいただいた次第である。1日でも開催すれば記録達成となるのだが、その証明証はかろうじて会期の末日に届けられた。残念なことにマスコミは全く騒ぐことなく、1行たりとも記録樹立が報道されることはなかった。従って入場者数は想定していた半分ほどに止まり、金銭的にも大幅な赤字である。もとよりこの点は覚悟はしていたものの、半年間に渡る様々な取り組みを考えると一絵描きとしては手に余る苦勞を強いられた結果となった。

絵描きと言えば、私は自分のことを「画家」とか「アーティスト」とは考えていない。便宜上仕方なくそう呼ばれることを容認しているが、自身は「絵描き職人」であり、またそうでありたいと考えてきた。何がそう言わせるのかとの釈明には多大な言葉を要するが、自ら進んで表舞台には立たない、技術の修練に努める、歴史や積み上げて来た経験に重きを置く、などの点はその差異とし特に主張されるべきであろう。見方を変えれば才能や能力に恵まれない人間の卑屈さから来る遠吠えに過ぎないのかも知れないが。

油彩画の絵筆を執って今年は奇しくも60年目に当たる。美術教育に携わってきた経緯の中で生徒たちには、「何でもいいから一万時間ほど没頭してみなさい、そうしたら何かが見えてくるはずだから、例えば好きなギターを一日3時間、10年ほど弾き続ければ自分にその世界が開けるかどうかの判断ぐらいはつくだろう」との見解を示して来た。全く持って無責任な提言だったと反省している。3万時間ほど費やしてのこの体たらく振りでは説得力も何もあったものではない。

福沢諭吉は他人の期待にへつらう生き方を厳に戒めている。私は極端な解釈を成し、無人島で絵を描き続けられるか自問する。結果、絶対に無理

である。神や仏とは言わないまでも、既に亡くしてしまった慈愛に満ちた母の目線ぐらいは欲しい人間である。こんな経験を持っている。貧乏を自認する私が事もあろうにヨットに興じていた頃の話である。風の吹き荒ぶ夕暮れ、天候の更なる悪化が予想される人気のない波止場に係留している様子を想像して欲しい。ワイヤーに巻き付いたセール（帆）がバタついてバタついて、このままだと損傷が激しく、セールは破れて使い物にならなくなってしまう。マストに登りその絡まった部分に対応するしかないのだが、命がけとも言えるその行動をなかなか決断できずにいた。そんな折、波止場の付け根辺りに一人の年配女性が心配そうにこちらを窺っている姿を発見した。正に発見と言うに相応しいものだった。その誰かが気にかけていてくれると言う一点で、意を決し行動に移すことが出来たのである。私が孤独に弱い証でもあるこの一件は、制作活動にも色濃く影を落とし、大きな課題となっている。世間様からは「学校の教員生活で好きな絵が描けて幸せですね」と称される。とんでもない誤解である。心の中は嵐の海が際限なく続いて、連夜の不眠症に苛まれ、縋るよすがさえ見当たらない。加えて制作活動はこの上なく孤独である。哲学者たちは孤独こそ最良の友であると説くが、その境地には到底至れそうにない。そうは言いながらも時として納得のいく手仕事ができただけは、少しばかりの安心感を持って眠りにつくことが出来る。願わくば日々に介在する「哀」を謳う作品が描けたらと思うのだが、なかなか思うようにならないのが世の常と言う事なのだろう。今はただ、これまで制作して来た作品たちが私の死後、焼却処分の憂き目に合わないよう真の評価に値する作品を描き続けるしかないのである。

「語る善より成す偽善」とは私の第2の座右の銘である。そんな面持ちで今なら600点・展も可能である。つまりお膳立てを済ませたステージでの記録更新は、いとも簡単である。しかし最早どうでもいい。むしろ明日にでも記録が破られて、その人と友達になりたいとさえ願っている。こんな風に考える私には考えれば考えるほど美術の歴史そのものがぞんざいに扱われ、或は意図を持った商売人や政治のツールとして扱われ過ぎて

来たとしか思えない。ピカソがアンリールソーに興味を示しただけでルソーは美術史に名を残す存在となった。そこまではいい。ところがあのピカソが評価したのだから、異議を唱えたら恥をかく。自分の感情は押し殺して称賛する。まるで裸の王様である。ピカソ自身が幼児画を描けなかったことを終生コンプレックスとしたための興味がアンリールソーだったことなどには思い至らないのである。個人的には日曜美術館などですべての作家に対しプラス評価に終始する姿勢も大きく問題を孕んでいると考えている。先人たちは放って置くと目には鱗が生えてくると警鐘を鳴らした。「例え血を流しても鱗をはがして真実を見極めよ」との教えである。従って多くの人々に自分の偽らざる目をもって、作品のみならずさまざまな事象に接して欲しいと切に願っている。

私の同級生で作家活動に勤しむ女性が常々口にする。「吉田君の絵は制作途中の段階が一番魅力的！」と。この論理で行けば、私の絶筆作品が最高傑作でなければならない。命尽きるまで絶え間ない奮起を要する。因みに彼女はさほど背の高い女性ではない。果たして妥当な高さだったのだろうか？ 138cm。

2026. 1

報告論文集 **越 境** 創刊号

2026年3月1日 発行

編集兼発行者 久留米大学比較文化研究所 日本・アジア比較文化研究部会
〒839-8502 久留米市御井町1635

印刷所 株式会社 久大エンタープライズ
〒830-0011 久留米市旭町67

